シリーズ

食の安全「基本のお話」

第12回

― 農薬の基本のお話⑥ 農薬の環境影響 ―

1. 農薬の使用はできるだけ控えるべきだと考えます。

農薬は基準通り使用されていれば、健康に影響するような残留量ではありませんが、以下の理由で、できるだけ減らした方がいいと考えます。

(1) 環境や生態系への影響の心配

環境影響の少ない農薬しか許可されなくなってきているとは言え、何らかの生態系への影響は否定できません。

(2) 作業者の事故や健康被害の心配

農水省発表の「2013年度の農薬による事故・被害の調査結果」によると、被害者は34人で、半数が高齢者でした。被害者のうち死亡者は4人で、農薬を誤って服用したことが原因だと考えられます。

(3) 害虫や雑草の耐性問題の心配

農薬を反復して使用するうちに、害虫や雑草がその農薬への抵抗性を持ってしまい、効力が低下していくということも起こりえます。

2. 国による環境・生態系と残留性にかかわる試験

農薬は、登録時、生物や環境への影響を様々な試験で調べます。その試験の結果で、影響の少ないもののみが農薬として登録されますが、その使用基準や方法は厳密に決められています。

環境を守るためには、
ルール通り正しく使わなければなりません。

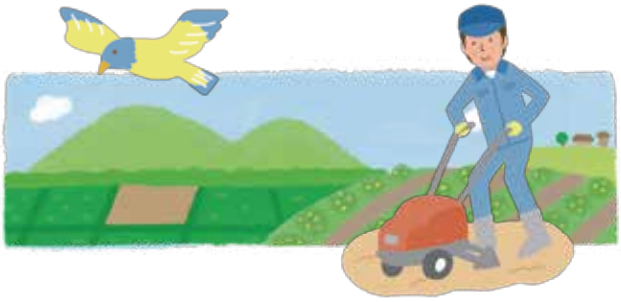
(1) いろいろな生物への影響を調べています。

水産動植物(魚、ミジンコ、藻類)やミツバチ、蚕、天敵昆虫も鳥などへの影響を調べています。一部の生き物に比較的影響がある農薬には、個別に注意事項が定められています。

(2) 自然環境の中での、分解性を調べています。

農薬は、光・空気(酸素)・水・微生物などで分解されます。
分解が遅く、環境中に残る可能性のあるものは、現在では農薬として登録されません。

3. いずみ市民生協は、自然環境や生き物を大切にする産地を応援しています。



いずみ市民生協の「産直産地基準」

① 組合員との幅広い交流を大切にする産地です。
② いずみ市民生協・わかやま市民生協の品質保証のしくみに対応できる産地です。
③ 自然環境や生き物を大切にする産地です。

次回は、いずみ市民生協の「農産物の安全性確保のとりくみ」について、お話します。

TOPIC

誤解 「メダカがいなくなったのは農薬のせい?」

千葉大学の本山教授や岡山大学の中筋教授らのグループが、このことを検証するために「実態調査」を行っています。

結論として、メダカの生育に最も影響をあたえるものは、「水路の水位」でした。

① 田んぼのまわりの水路や小河川がコンクリートの3面張りになった。
② 稲の生育時期以外は田んぼが干上がっている。
③ 周辺のため池や湿地が減った。
④ 家庭の一般排水により水路が汚された。

メダカの減少と農薬は直接結びつかないとのことですが、農薬が原因で鳥や魚などが死んでしまうという事件や事故は起きています。農薬はルール通り使わなければ、生き物を傷つけたり、苦しめたりしてしまいます。

〈出典:松永和紀著 『踊る「食の安全」一農業から見える日本の食卓』〉